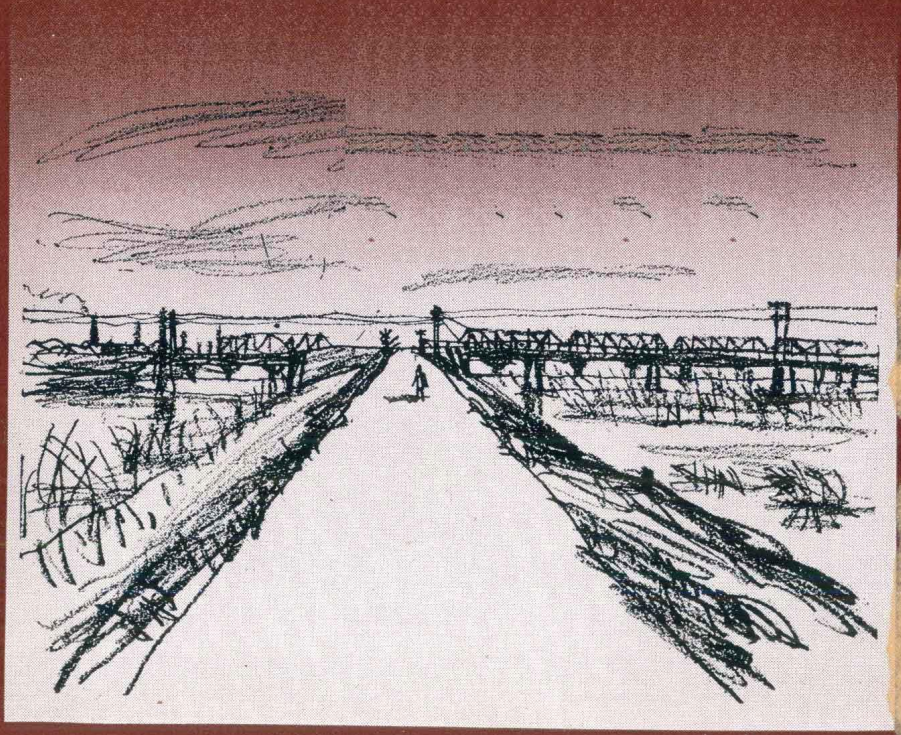
早乙女勝元
小説選集
12

あした私は行く

早乙女勝元小説選集

12

あした私は行く



早乙女勝元小説選集・12
あした私は行く
1972・初版
作者　早乙女勝元©
画家　久米宏一

制作　小宮山量平
発行　山村光司
株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一五-六
電話　〇三(203)五七九一
振替　東京九-九五七三六
B6判　284P　0393-96912-8924
一九八四年　九月　第六刷

まえがき

きみの行く道に……

思えば、まだ十五、六歳の頃、下町の片隅にいて、文学の道を志した仲間はどっさりいた。

みな意欲的に目を輝かせて、夜眠るのも忘れ、自分の胸にこみあげてくるテーマを語ることに、夢中だったものだ。そのなかには、ぼくよりもはるかに恵まれた才能も、無数にきらめいていたと思う。

二十年たった。かつての少年たちは、青年になり、恋をし、生涯の伴侶を得、さらに子どもを得て、それぞれの場所におちついた。小さいながら、安定した生活に、である。いまなお文学の世界で、トーフのかどにでも頭をぶつけたくなるほど悶々としている者はいない。ついに、ぼくだけになってしまった。

友人たちの多くは、結婚で最初のフルイにかけられ、残った者もそのあと子どもができて、もう一つのフルイにかけられたように思う。一人取り残されたぼくにしたところで、一体どこまでこの道のきびしさにたえることができるの

だろう。……

しかし、考えてみると、フルイにかけられるのは、単に文学への理想だけではない。人間の人間らしさもまた、おなじなのではないだろうか。かつての仲間たちが、文学への志と同時に、あの少年期に持っていたはちきれるような正義感や、情熱や、真摯な精神までどこかへおとしてしまったとしたら、それは、あまりにも悲しいことである。

あした私は行く——こんどの本で、ぼくは、人間の人間らしさについて、じっくりと考えてみた。

それは、どうやらナイーブな心を持つ青春期において、宝石のようにかたく鋭く、自分の手でみがきあげねばならないかのようである。たとえば、どのようなとき、どのようにしてか、と問われるならば、ぼくはこの小さな物語をおくるとしよう。十九歳のヒロイン、草野美保がひたすらに生きた道は、ぼく自身の明日の生活への人間らしさに通じる。

ただし、この一篇は、オール・フィクションではない。ぼくの住んでいる東京の下町に実際にあった事件を取材し、構成したものである。

草野美保、きみのいく道に光あれ。

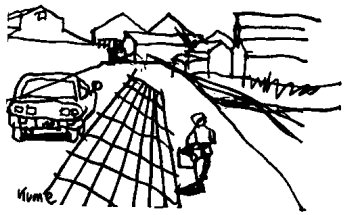
早乙女　勝元

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

あした私は行く

もくじ

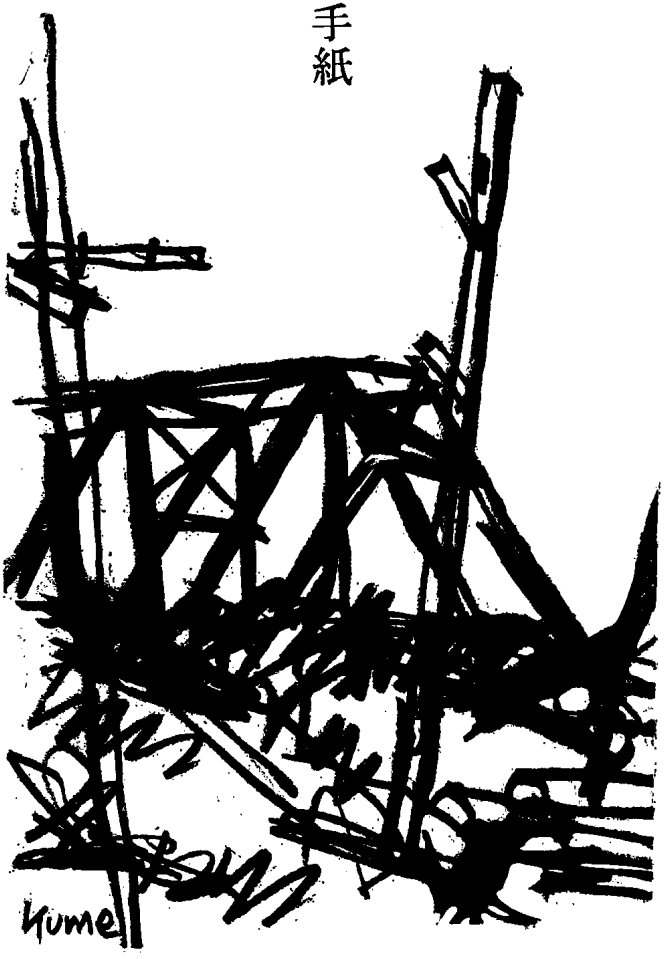
まえがき　1
第一の手紙　5
第二の手紙　39
出さなかった手紙　73
第三の手紙　91
第四の手紙　139
第五の手紙　187
第六の手紙　221
てのひら自叙伝〈12〉　271
早乙女勝元年譜　274



そうてい・カット

久米　宏一

第一の手紙



おかあちゃん。

お元気ですか。……と、いつもいつも書いてきたのに、きょうから当分のあいだそういえないのかと思うと、なんだか、胸のおくがきゅんとしめつけられるような思いがします。

入院したんですってね？

広島のおばさんから、きのう、工場へかかってきた電話で知りました。

「あの曲がった腰によ、カイロをゆわえつけて、日がな一日外ではたらいていたもんで、さすがのおそのさんも、ちょこんと疲れがたまっちまったらしいよ。家に一人でぶらぶらしているのもたいくつだろうから、まあ、半月も休養をとるつもりで、気軽に入院してもらったんだけどね。なあに、心配はいらないよ」

そんなわけだから、美保ちゃん、気にせんどいて……と、おばさんはいいましたけれど、私、それをきいてからというもの仕事も手につかず、ゆうべも、やっぱり寝つかれませんでした。

お正月に家へかえったとき、気のせいか、おかあちゃんがひとまわり小さくなったように思えて、「あれ、カッコよくなったじゃ？」なんていって私笑いましたけど、思えば、あのときから、病気がからだに出ていたんじゃないのかしら。それに、前ほどニコニコ笑いませんでしたね。なんだか、ぽっさりと気がぬけてしまったみたいな感じで、ときどき妙な寒気がするとか、胃がおかしくなる……などときくと、正直のところ私は、おぞうにもろくにのどに通りませんでした。

イカとカツオのおすましは、さすがに、おかあちゃんの自慢の腕だけあっておいしく、年の数だけ食べるきまりの一口もちも、おかあちゃんのからだのことを考えているうち、いくつ食べたかど

忘れしてしまい、
「あれ、美保は、まだ十四歳だったかえ?」
なんておかあちゃんにいわれて、はっとするしまつでした。私は十四個の小さなおもちを食べていたのです。
おかあちゃん。
広島のおばさんのいうとおり、やっぱり、はたらきすぎたんですね。六十近くにもなって、重い木のゴミ箱をがらがらひきながら、一日中外を歩きずくめの仕事は、きっと、からだにこたえていたのでしょう。
「きょうは、おしっこをするとこが見つからなくてね、おなかが痛くて目がまわりそうだったよ」
失業対策事業——一般に〝日雇い〟といわれる仕事についたはじめのころ、おかあちゃんは家へかえってきて、ぽつんとそういったものでした。
「あら……そういえば、いつも、どうしてるの?」
私が、びっくりしてきいたら、
「草っぱのかげなんかでね」
「まあ、いやだ、いやだあ。おかあちゃんたら、いやだわ」
「でもね。夏は草っぱもあるけんど、冬はねえ……」
けたけた笑っていた私は、そのとき、ショックを受け、とつぜんに目がしらがじいんとあつくなって困りました。どうしようもなく、目のふちが涙でふくれあがってくるのです。おかあちゃんは、

この五年間、そんな大変なところではたらいてきたんですね。私は、ちっとも知らなかったのです。一人娘のくせに、なんてうかつだったことでしょう。

入院といっても、別に手術をするわけでもないとのこと。ただの疲れをとるだけだそうですから、あんまり気にせずに、よく食べよく寝て、早く元どおりに元気になってください。

私も近いうち、ぐあいを見にとんでいきますけど、すこし先になります。なにしろ、いくだけで列車と船で丸一日がかりともなると、時間的にも、ケイザイ的にも、ね。ふるさとは、やっぱり遠いなあ、と思います。

そのかわり、これから、長い長い手紙を書くことにします。たった一人で病院にいるおかあちゃんがさびしくならないように、思いきって、なんでもかんでも、みいんな書くことにしますね。いいことも悪いこともふくめて、一九歳になった美保のぜんぶを。

*

きょうの日曜日は、会社で、ちょっとおもしろいことがありました。

私のはたらいている矢口科学KKが、創業十周年を記念して、工場の四階屋上にある大サーキット場で、モデル・レーシングカー競技大会をひらいたのです。モデル・レーシングカーというのは、前におかあちゃんにも見せたことがありましたけど、模型の競走用自動車のことなのです。つまり、自動車レースを、ミニサイズで楽しむゲームでしょうか。自社製のモーターをとりつけた各種のモデルカーが、「謝恩」の名のもとに何十台となく用意され、町中どなたでも無条件でこの大会に参

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

加でき、優勝すれば、たくさんの賞品がもらえるとあって、それはそれは、押すな押すなの大盛況でした。

会社はいままでも、毎週土曜日の午後にサーキット場を無料で開放し、モデルカーも自由に使わせて、町の子どもたちに人気とりのサービスをしていたのですけれど、こんな大がかりな競技大会ははじめてのことです（さいごでもありますけど）。モデルカーは一台千円以上もしますし、サーキット場へいけば、百円で、たったの十五分しかあそべません。ブーンと走って、あっというまにおわってしまうのですから。なにからなにまでタダで、その上賞品がどっさり、おこづかいをもらえぬ子どもたちにとっては、ほんとうに夢のようなお話ですね。

ここは、東京の下町。めったに、お日さまの顔も見ることのできない密集地。バス通りには車がジュズつなぎになっていて、一歩横丁に折れると、パープレスやケトバシの音がたえまなしにひびいてくるような零細工場街です。その横丁も、朝から晩までクラクションだらけ。そこのけそこのけ車が通る。そんな、あそび場一つないような町ですから、貧しい子どもたちが、土曜日ごとに無料サービスしてくれる矢口科学ＫＫのことを、《夢の工場》とよび、そこにはたらく私たちまで、羨望の目で見られるのは、しかたのないことかもしれません。

ケン坊も、その一人です。

「お姉ちゃん。おれ、とるよ。一等と賞品！」

ワーワーキャーキャー、サーキット場のものすごい人波と興奮のどよめきの中で、ケン坊は意気ごんでいいました。ちんまりとした鼻が空をむき、その目がらんらんです。わずか七歳の子どもで

も、勝負の前に緊張しているのです。
「うん、大丈夫よ。おちついてやれば、きっと一等とれるわ。でも、よその車に気をとられちゃだめよ！」
マイペースで——とコーチする私だって、なんだかおちつきません。
ケン坊には、どうしても賞にはいってもらわなくちゃ……祈るような気持ちって、こんなときのことをいうのでしょうか。
「あら、ボーイフレンド？」
ふりかえると、おなじ職場の加代ちゃんが、はればれとした顔で笑っていました。まっかなセーターに、まっかなルージュ。このひとは、いつもはで好みです。その赤石加代子さんの肩ごしに、ピカちゃんの顔も、克子さんの顔も見えます。
「よう、調子は、どうかね？」
男沢克子さんは、専用コントローラーを手にして、それこそ男みたいな低音でぼそっといい、
「あたしはね、きょうは、この子の応援団長よ」
と私がいえば、
「あらあ、ボーヤ、しっかりね！」
ピカちゃんこと、班長の玉水光子さんが、ケン坊の頭に手をあてて、にっこり。
加代ちゃんも、克子さんも、それからピカ子さんも、みな私とおなじ職場のひと。ひらたくいえば、第九ベルトラインのメンバーです。きょうは、町のイカす男性もがっぽり集まるとあって、み

な大いにきばって、最大級のおしゃれではりこんでいるのが、そのそわそわした感じでも、よくわかります。

午前十時、レース開始。ほんとうは予選レースから、決勝へとすすむのですが、こんなに大勢の応募者がサーキット場へつめかけては身動きもできず、会社は予定を変更して、一発勝負の本番レースで、決勝をあらそうことになりました。

一レースには、八台のモデルカーがならびます。車種は、GT、フォーミュラー、ストッグ、ドラッグスターの四種で、どれをえらんでもいいのです。それぞれの車は、先端についたガイドをコースの溝(レーン)にさしこみ、長いコードをつけたコントローラーの操作によって走りだすわけですが、加代ちゃんの車は、いざとなったらウンともスンともいわず、みんな大笑いでした。

克子さんのは、ご自慢の愛車ですが、このひと、コントローラーを手に、コースの上までぐっと身をのりだし、

「ツッパシレ！」

「そら、そら、ツッパシレ！」

と、ほえるような声でさけび、見物人はやんやの拍手。

「あのひと、まるで、ガメゴンみたい」

と、ケン坊が私にささやいたとき、克子さんはお調子にのってブンブン飛ばし、愛車は急カーブをまがりきれずに、空中に一回転してガチャン。このレースは脱線事故が多く、転倒車続出。結局さいごまで〝完走〟したのは二台だけ。先頭きって、みごと賞品を手にする権利を得たのは、班長

ピカちゃんでした。
「うふふふ。やっぱり、ピカ一よ。ツキがまわったんだわね」
とは、玉水光子さんのうわずった声でしたが、私はそれどころではありません。つぎは、いよいよケン坊の番です。ゼッケンをつけた八人の選手たちが、コントローラーを手にして、ぞろりボックスに一列にならびました。ケン坊は三番ですが、選手たちの顔ぶれをたしかめたとき、私はあっと小さな息を呑みこんだものです。敏夫がいるのです。金谷敏夫が……七番に！
敏夫がこの場所にいるのは、ふしぎはないのですが、まさかケン坊といっしょにレースに参加するなんて、一体ぜんたいどういう風のふきまわしでしょう。
ほかの七人の選手たちの目は、スタートラインの自分の車をしかと見つめ、呼吸をとめ、かわいそうにケン坊なんかコチンコチンに緊張しているのに、敏夫ときたら、くわえタバコでのんびりしたもの。あそび半分か、さもなければ、腕にそうとうの自信があるのでしょう。もしかすると敏夫は、ケン坊の車を追いたててくれるつもりかしら？　そうです。ケン坊と顔見知りの敏夫なら、そのくらいの気をきかしてくれるのが当然というものです。
ランプがついた。それ、スタート！
熱っぽい空気をひきさいて、ブーンブンとモーターの音もかろやかに、八台が直線コースにのりだしました。五番車がトップ。つぎは三番、ケン坊です。出足よし。
直線は、全速力で。……私は思わず手に汗をにぎります。
「安心して飛ばして！」――と、加代ちゃん。

「そう、そこだ。そら、ぐっと出て！」——克子さんの声援。
やがて、みるみる魔の第一コーナー。45度の急カーブ。ここが、いちばん危険です。直線コースの速力をセーブできずに、車はカーブの外へふっとんでしまうことが多いのです。
ガチャン。急ブレーキで、一番車が転落、つづいて四番車は、後部をズリ下げたまま、バンクに突入。これもカーブの外へ。
ケン坊の車は、ぐっと速力をおとして、おどおどと、ためらうようにカーブをきりました。まだるっこいスピードで第一コーナーを、ゆっくりと回転、とたんにぷるぷるとお尻をふりだしました。
「だめ。急に加速したらスピンする！」
私の声は、思わず大きくなったようです。
そのとき、三番車の横を安定したスピードでゆうゆうと追いぬいていったのは、なんと七番車です。七番車はつづいて、トップを走っていた五番車と肩をならべ、そのまま追いつ追われつS字コーナーへ。おそろしくカーブに強いGT型車なのです。ひょっとすると、タイヤに接地性を高めるための除光液か、コーラなど、しめしてあるのかしら。敏夫は相手を先行させておいて、カーブでゆうゆうとぬくつもりなのでしょう。あせった五番車が、つんのめるような勢いでスピードをあげると、七番車はこれをたくみにひきつけておいて、S字カーブの傾斜で、軽くライバルをカーブの外へはじき出してしまいました。
七番車がトップ。敏夫の車です。
お尻をぷるぷるとふるわしながら、必死の勢いで、これに追いすがるのがケン坊。

レースを見守る人たちもレーンにとけこみ、サーキット場の中は熱っぽい空気があふれます。みな、勝ちそうだと思った車や、知人の車に注目して、息をとめ、手に汗をにぎる一瞬。ケン坊と敏夫の勝負。私は無意識のうちに、見物人のあいだをくぐりぬけて敏夫のそばへ近づきました。

「ねえ、敏ちゃん……」

敏夫は、びくっとした感じでしたが、目だけは、執ように七番車に釘づけになっています。

「あなたのあとは、ほら……ケン坊なのよ。だめじゃない！」

「う？」

と、敏夫は私の気迫におされて、たじろいだとたんに、指がブレーキボタンをおしすぎたのか、七番車はがくんとスピードをおとして、さかだちでもするようにコース上に直立し、レーンからはずれて横転。

全力でこれを追ってきたケン坊は、思わぬ障害物をかわしきれずに、真正面から七番車と激突して、ぴゅうんと空中へはねあがり、みなが悲鳴をあげたときには、きりもみ状態になってコース上に墜落。スポンジの前輪ははじけとび、車体はみるもむざんにバラバラ分解してしまいました。すべては、ほんの一瞬の出来事でした。

*

二時間後——。

「あれが、ほんとうのレースだったら、えらいわけのもんだったな。いまごろ、おれはケン坊と二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co